

入選 小学生の部

まほうの言葉

磐田市立長野小学校 六年

大町 奈菜夏

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

私と友人は一日に何度もこの会話をします。友人はすぐにお礼を言ってくれます。その友人はブラジル人で、日本に来てからまだ二年とちょっとしかたっていないので、日本語があまり得意ではありません。彼女は五年生の二学期の始業式の日に私のクラスに転校してきました。

初めて話したのは、始業式の大そうじの時でした。何をしていたのか分からなくて困っている様子だったので、話しかけました。その時の会話で印象的だったのは、彼女の「ありがとう。」という言葉でした。私の身ぶり手ぶりでの説明を一生けん命に

聞いて理解してくれました。

「オブリ：あつ：。」

彼女はとっさにポルトガル語でお礼を言うようになりました。そしてあわてて、

「ありがとう。」

と言い直しました。慣れない日本語で伝えようとしてくれたことがとてもうれしかったです。だから、私はその時の「ありがとう。」の言葉が忘れられません。

その出来事から私たちはとても仲良くなりました。彼女は分からない事があると私をたよってくれるようになりました。教科書に書いてある日本語の意味を説明したり、彼女が先生や友達に伝えたい事を私がかわりに伝えたりしています。彼女はちょっとしたことでも、すぐにお礼の言葉を言ってくれます。私は彼女に「ありがとう。」と言われると、ほんわかした気持ちになります。私は彼女が一生けん命なので、助けてあげたくありません。彼女は私に「ありがとう。」の気持ちをたくさん伝えてくれるので私もその返事として「どういたしまして。」と言います。

これとは逆に私が外国人の立場になって「ありがとう。」を言ったことがあります。

それは、去年イギリスに行ったときのことです。重い荷物を持って困っている私達に、何人もの人が、

「キャン アイ ヘルプ ユー？」

と話しかけてくれて荷物を運ぶのを手伝ってもらいました。慣れない土地で親切にしてもらってとてもうれしい気持ちになりました。

「サンキュー ベリーマッチ。」

「ユアー ウェルカム。」

手伝ってくれた人は笑顔でそう言って立ち去っていきました。見知らぬ土地で見知らぬ人に親切にってもらってとても温かな気持ちになりました。

「ありがとう。」「どういたしまして。」

この言葉には私たちが優しい気持ちにする魔法の力があります。世界中の人が笑顔になれると思います。私はこれからも、この言葉をたくさん使ってたくさんの人を優しい気持ちにしたいです。

ぼくと一年生

浜松市立都田南小学校 六年

岡本 颯一郎

ぼくは、今年で六年生。学校の中で最高学年だ。四月、ぼくの学校では、六年生が一年生のお世話をすることが決まっている。正直なところ、ぼくはあまり乗り気ではなかった。なぜなら、ぼくは人見知りで、初対面の人と何を話せばいいかわからないからだ。それに、小さい子にどう接しているかわからなかったからだ。

ぼくのお世話当番の日が来た。ぼくは不安な気持ちをかかえながら、友達と一年生の教室へ向かった。

「一年生のお世話、とても楽しみだね。」と、友達が言った。ぼくは、どうしてそんなに楽しみなのか不思議に思った。

「おはようございます。」
と言いながら一年生の教室に入った。すると、

「おはようございます。」

と大きな声であいさつを返してくれた。ぼくの気持ちの不安は少しやわらいだような気がした。友達は、さっそく困っている子を見つけ、お手伝いしていた。ぼくは、すぐに動くことができずにしばらく様子をながめていた。すると目の前にいる男の子が、机に何を入れればいいのか困っている様子だった。ぼくは勇気を持って話しかけた。

「机には赤白ぼうしと三角巾をしまおうよ。」
するとその子は、赤白ぼうしと三角巾を机にしまった後、笑顔でぼくに、
「ありがとう。」

と言ってくれた。その後も、三角巾をつけてあげるお手伝い、ヘルメットを片付けるお手伝いをした。一年生とだんだん話せるようになり、不安がすっかりなくなつて、ぼく自身もとても楽しんでることに気が付いた。教室への帰り道、
「一年生かわいかったね。」

と友達に言われた時、心から、
「うん。かわいかったね。次も楽しみだね。」
と返事をする事ができた。

最初はとても不安だったけれど、一年生に、

「ありがとう。」

と言ってもらえて、ぼくはとてもうれしい気持ちになった。ぼくは、お世話をすることが楽しくなった。一年生のお世話をすることで、ありがとうと言ってもらい、うれしい気持ちになった。親切にすることの、うれしさ、大切さを知ることができた。



最期の気遣い

磐田市立大藤小学校 五年

神原 和人

ぼくにはひいおじいちゃんがいた。ひいおじいちゃんは、ぼくが生まれた時から、いつもぼくを可愛がってくれた。ぼくは、大人になって働くようになったら、ひいおじいちゃんに何かしてあげたいと思っていた。

しかし、一年前、ひいおじいちゃんは、急にご飯が食べられなくなって、身体が少しずつ弱っていった。最初は、おばあちゃんが家で介護をしていたが、介護が大変になり、途中から病院に入院した。ぼくは、毎日毎日ひいおじいちゃんの顔を見に病院まで行った。そのたびに、ひいおじいちゃんはニコニコ笑って、

「ありがとな、ありがとな。」
と、ぼくに心配をかけないように、元気にふるまってくれた。ぼくがひいおじいちゃんを元気づけてあげなければいけないの

に、ぼくがひいおじいちゃんに元気づけられていた。

だんだんとひいおじいちゃんの体調が悪くなり、お見まいに行ってもねている日が多くなっていた。でも、ぼくが行って耳元で、

「お見まいに来たよ！」

と言うと、うっすら目を開けて、うんうんとうなずいてくれた。

そして、亡くなる二日前のこと。ぼくが病院に行くと、目をつむって息苦しそうにしているひいおじいちゃんがいた。ぼくはとても悲しくなったけれど、ひいおじいちゃんの前で泣いてはいけな思っていたのでがまんした。またぼくが耳元で、

「今日もお見まいに来たよ！」

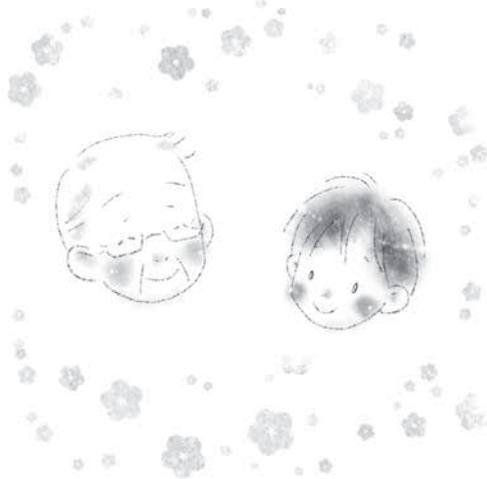
と言うと、

「ありがとな、これからもがんばれよ…。」
とかすれる声で言った。

その二日後ひいおじいちゃんは天国へと旅立った。でも、ぼくはひいおじいちゃん

の、
「ありがとな、これからもがんばれよ…。」

という言葉が今でも忘れられない。どんなに自分が大変な時でも、常に人に対して感しゃの気持ちを忘れず、人を気づかってあげられる、そんなひいおじいちゃんのような人に、ぼくはなりたいたいと思っている。



親切を考えてみた

焼津市立和田小学校 六年

杉山 愛彩

ん、親切？

普段から使われている親切という言葉。

友達、家族、先生、近所の人、色々な人達
が使っているけど、改めて考えてみると、
親切って、どういう意味なんだろうと、ふ
と思いました。そこで調べてみることにし
ました。

意味「人情のあついこと、思いやりがあ
り、人のために尽くすこと。」と書いてあ
りました。相手のことを思い、その人のた
めに何かをしてあげることなんだと、改め
て理解することができました。何げなく
使っている言葉でも、その言葉の意味を知
らないことがあるということに気付き、調
べることの大切さに気がきました。

最近、親切なことしか思い出してみて
も、思い出せない。だけど、家族や友達に

対して絶対、親切なこととはしているはずだ。
思い出せないってことは、本当はしていな
いのかな。だんだんと不安な気持ちになっ
てきた。

親切って、相手の人から、

「親切にありがとう。」や「ありがとう。」

と言われないと親切ではないのかな？

疑問に思ったので親に聞いてみることに
しました。そこで父親に聞いてみると、

「相手に対して、何かをしてあげる親切と、
相手が目の前にいないけど、できる親切が
あると思うよ。目に見えないような小さい
親切、だれも気付かないような親切、人を
助けるような親切など、親切なことは小さ
い大きい関わらずあると思う。」と言われ
ました。それを聞いて私は安心しました。
ありがとうと言われなくても、している親
切があるということに。

ひとつの言葉でも大切な意味があること
がわかり、どんな言葉でもふと疑問に思っ
たら調べてみようと思いました。

親切って、いい言葉だな。

人をたすけることは大切

静岡市立清水船越小学校 三年

土田 隼悟

ある日の朝、ぼくは一時間おくれて、お
母さんと学校に車で向っている時、スー
パーマーケットの前を通ると、自てん車で
車道がわにたおれてころんでいる、おばあ
ちゃんがいた。

ぼくは学校にいそいでいたし、お母さん
は、ぼくを学校におくってからしごとに行
かないといけなかった。ころんだおばあ
ちゃんをたすけようかまよった。

でもお母さんのしごとは、お年よりのお
てつだいをしているしごと。

「学校にいったいおくれちゃうけど、たす
けてあげようか。」とお母さんが言い、ぼ
くも、「たすけてあげよう。」と言った。

車をいそいで止めて、お母さんは、おば
あちゃんの所に行った。

ケガの様子を見て、足がはれていたけど
歩けそうだったから、車にのせてあげて、

家におくってあげた。その後もおばあちゃんがつてきた自てん車も家までとだけた。

ぼくは、学校。お母さんは、しごとにものすごくおくれてしまったけど、おばあちゃんをたすけられてよかった。

「人をたすけることは、とても大切なこと。いいことも、わるいことも自分に返ってくる。」と、お母さんは教えてくれた。

次の日イオンでまいごの子がいた。ぼくはお母さんの言葉をおもいだした。

人をたすけることは、大切なことだ。はずかしいけど、まいごの子に声をかけて、その子の姉ちゃんの所までつれて行った。

姉ちゃんに会えてうれしそうだった。

ぼくも人をたすけることができた。人をたすけると気持ちスツキりする。

またこまっている人がいたら、まよわずたすけてあげたい。

みんながたすけ合えば、こまる人がへるからみんなへいわにくらせる。

ぼくにも妹がいるから、お母さんに教え

てもらった言葉を今どは、ぼくが教えてあげようと思う。

小さな命が教えてくれたこと

浜松市立庄内小学校 四年

徳増 藍

わたしには、一才の弟がいます。母のおなかの中に弟がいることを知ったのは、一年生の冬でした。母のおなかは弟の成長と共に、どんどん大きくなっていきました。母はせがとも小さくて、大きなおなかが目立っていました。にんしん六か月の時には、もうすぐ生まれると思われることもよくありました。母はおなかが大きくなると、今まで当たり前でできていたことも大変に感じたり、つかれやすくなっていました。そんな年の夏休みに、父と母は赤ちゃんが生まれたら行ってあげられないからと、わたしがずっと行きたかったテーマパークへ、二はく三日でつれて行ってくれました。それは、おなかの大きな母にとっては大変

なことでした。夏休みで園内はすごい人の数でした。休みたくても空いているイスはなく、母は近くの日かげで、かべにもたれるように立って、わたしと父がもどつてくるのを待っていました。一日目、ホテルに帰ると、つかれていたのか母はすぐにねてしまいました。

二日目も母は、日かげでわたしと父がもどつてくるのを待っていました。三十分くらいして母の所へもどると、母は近くのイスにすわっていました。この日は何度かイスにすわって待っていることがありました。でも、きのうと人の数は変わらなかった。空いているイスも見あたりませんでした。ホテルへ帰るバスへ乗ると、すでに席はなく、手すりにつかまって立っていました。すると二人の男の人が立ち上がり、母に席をゆずってくれました。母はお礼を言うと、近かった方の席へすわりました。母がこの日テーマパークでイスにすわって待っていたのも、同じように席をゆずってくれた人がいたからなんだと気が付きました。弟は生まれてくる前から、わたしに人の

やさしさを教えてくれました。二度と会わないかもしれない母に、親切にしてくれた人は、

「ありがとうございます。」

と、お礼を言って立ち去る母に笑顔で、

「どういたしました。」

と、言ってくれました。大変そうだな、つらそうだなと感じて声をかけたとしても、ことわられてしまうかもしれません。でも、十人に声をかけて一人でもありがとうと思ってくれたのなら、その行動は、まちがっていないのだと気付くことが出来ました。わたしはその一人の人のために、はるかしくても、ドキドキしても、声をかける勇気を持ち続けていたいと思います。そして、あの日、母に親切にしてくれた人たちのおかげで、弟はとても元気に生まれ、すくすくと成長しています。

世界との出会い

藤枝市立大洲小学校 四年

中野 色季

ぼくのおばあちゃんが、ラオスと言う国に学校を建設しました。ラオスの北部ルアンパバーンと言うところにある学校で四つの村から子ども達が三百人通っているそうです。

なぜ、ラオスに学校を建てたのか？おばあちゃんに聞くと、こんな話を教えてくれました。世界には学校に通えない人が約八億人いるそうです。日本では当たり前のように学校へ行つて勉強出来るけど、自分の名前も書けない、字も読むことができない子もたくさんいます。まずしくて学校に行けない子がいます。そして、学校がないと。だからそういうところに学校をどうしても建ててあげたいと考えて、おばあちゃんの働く会社ではボランティア活動をしているそうです。今、アジアを中心に百六十八校が開校していて、去年十一月に

ラオス「原小学校」ができました。ぼくのおばあちゃんの名前がついた学校です。それから、一人の女の子が将来の夢を話してくれたそうです。「大きくなったら、先生になってもっと多くの人に勉強を教えてあげたい。そのために毎朝、家の手伝いをしてから学校へ来てます。」

と。ぼくは、とてもびっくりしました。学校に行けば友達がたくさんいて、色々な事を教えてくれる先生がいて、勉強することも遊ぶこともぼくには毎日当たり前のよう出来るです。

世界には色々な場所で、ぼくと同じくらいの年で、がんばって生きている子が大ぜいいることをおばあちゃんは教えてくれました。ぼくも大きくなったら、世界中の色々な場所へ行つてみたいです。そして、ぼくの住んでいる日本のことも教えてあげたいです。

マンションのエレベーター

浜松市立葵が丘小学校 六年

袴田 千陽

「何階ですか。」

私は自分の後から乗ってきた人に向かってこう言う。

「七階です。お願いします。ありがとうございます。」

「さいます。」

私の住むマンションのエレベーターでは、こんなやりとりがよく見られる。私は、このときとてもやさしい気持ちになる。でもこれは小さなころからできているのではなく、周りの、大人のやりとりを見たり、自分が何回もボタンを押してもらったりしたからできるようになったことだ。

そして、兄が大人に向かって言っているのを見た時に、こうすればいいと分かり小学校四年生くらいから、兄の真似をして、乗ってくる人に声をかけられるようになった。

エレベーターの中では、あいさつを交わして、大人の方からその日の天気のことや

学校での様子を尋ねてくることが多い。名前も住んでいる階も知らないけれど、顔はよく知っている同じマンションの人達との数秒間のやりとりは、「何階ですか。」の一言がきっかけになっている。

でも、私は見たことのない人や、あいさつを返してくれない大人に対しては、とても緊張をする。そういう時は、あえて声をかけないようにして下を向いている。不しん者だったらどうしようと、とても心配になるからだ。

父も母も仕事で夜までいないため、私にとって同じマンションに住む人たちは、私を安心させてくれる存在だ。

ある日学校から荷物をたくさん持ってエレベーターに乗りこんだ。先に乗っていた上の階に住むおばさんが、

「何階ですか。もう夏休みになるのね。」と聞いてくれた。その時両手がふさがっていたので、ボタンを押してくれてうれしく思った。そして、私に関心を持ってくれたこともとてもうれしく思った。

エレベーターに乗っている短い時間だけ

れど、私は人と接する上で大事な事を毎日勉強できている。

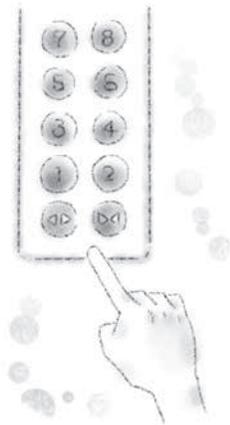
家族と買い物に出かけると、父が知らない人にも、

「何階ですか。」

と聞いている事がある。よく見ると、ベビーカーを押しているお母さんだったりお年寄りだったりする。私もお手伝いが必要な人をエレベーターで見かけたら、勇気を出して、

「何階ですか。」

と、声をかけてみようと思う。



やさしいゆうびん屋さん

焼津市立小川小学校 二年

宮路 杏

学校からいえにかえってきたとき、ドアのゆうびんうけをあけて見たら、おかあさんのくつがありませんでした。

「もしかしたら、おかあさんがいないかもしれない。」

と、思い、おかあさんの車を見に行ったら、ありませんでした。チャイムをならしても、おかあさんは出ませんでした。

「やっぱりない。」

と思い、かなしくなりました。わたしは、げんかんの前のかいだんにすわって、ないてしまいました。

すこしたつと、ゆうびんやさんが手がみをとどけに、バイクできました。手がみをくれたあと、わたしに気づいて、

「ごうしたの。」

と話しかけてきました。

わたしは、おかあさんがいないことを話

しました。すると、ゆうびんやさんが、

「たべものかのみもの買ってきてあげようか。」

と、言ったので、わたしは、

「のみものがいい。」

と言いました。ゆうびんやさんが、のみものを買ってきてくれました。

「だいじょうぶ。もうなきやんでね。」

と言ってくれました。ゆうびんやさんのおかげで、すこしおちつきました。ゆうびんやさんは、つぎのはいたつへ行ってしまうました。

すぐあと、ちがう学年の子がいえの前を

とおり、

「どうしたの。」

と、こえをかけてくれました。わたしは、ゆうびんやさんの話をしました。

「そういえば、ゆうびんやさんがのみものを買ってたね。」

とわたしに言いました。そのとき、おかあさんがかえってきました。おかあさんがきて、うれしかったです。

ゆうびんやさんにはしごとがあるのに、

なぐさめてもらって、うれしかったです。

とおりがかった子たちも、ないているわたしにこえをかけてくれて、やさしいなと思いました。ゆうびんやさんにおれいと言いたくて、ホッカイロをよういして、会えるのをまっていました。ふゆのはいたつはさむいから、おれいにホッカイロをわたしたかったです。なん日かして、ゆうびんやさんに会えました。おれいを言って、ホッカイロをわたしたら、

「おれいなんていいですよ。ぼくにも、同じくらいの年の子どもがいるので、なんとかしてあげただけです。」

と、言ってくれました。

わたしがたすけてもらったように、わたしも、こまってる人にやさしくしてあげたいな、と思いました。



思いやりの先の親切

浜松市立伊佐見小学校 六年

山口 結生

ぼくはプロ野球が好きで球場やテレビで観戦するのですが、先日テレビである場面が映し出された時、何だか今までに感じたことがない心温まる気持ちになりました。

それは打球の行方を追っていたカメラがとらえたもので、客席に入ったボールを若いお兄さんがキャッチし、次のしゅん間前にいた小さな男の子のかたととんとんたたいてボールをその男の子に差し出した映像でした。男の子とそのお母さんとはつ然の出来事にビックリした様子でしたが、すぐに頭を下げてうれしそうに受け取っていました。ぼくは今まで選手が使っているボールを手にしたことはありません。飛んでくるボールや選手が投げられるボールをみんなでごぞって取りに行く中、そのお兄さんは知り合いでもない男の子に、何のためらいもなくボールをわたす姿を見て、

いつもなら良いなあとうらやましい気持ちでいっぱいになるのですが、この時はなぜか、このお兄さんなんてカッコイイんだらうとすごく感動してしまいました。

今回小さな親切というテーマを見たときにまさにこういうことなのではないかと、真っ先にこの出来事が頭にうかびました。そこで家の人に、

「親切ってどういうことがあるかな？」

と聞いてみたのですが、

「困っている人を助けたり、こうしたら相手は喜ぶんじゃないかっていうことを、無意識にすることだと思うよ。とにかく常に相手を思いやる気持ちを持てる人が出来ることだよ。」

と言って具体的には教えてくれませんでした。だが、親切と思いやりは同じなのかなと疑問を持ったので辞書で調べてみました。そうすると、親切は人に対する思いやりが深いこと。思いやりはその人の身になって、親切に考えてあげることとなっています。やはり思いやりの先に親切があるんだということが分かりました。

思い起こしてみると、ぼくも色々な人に親切にしてもらっていました。

エレベーターをおりるとき、開ボタンをおして先に出させてもらったり、満員電車でねむそうに立っていたぼくを席に座らせてくれたり、飛行機でまど側の席をゆずってくれたり、まだまだたくさんあることに気が付きました。それに対して、ぼくは自分のことしか考えていなかったなとすぐ考えさせられました。

これからは人や動物、生きているもの全てに常に思いやりを持ち、ほんのさ細な事でも親切に出来る人間になれば良いなあと思いました。いつかあのお兄さんのようにカッコイイ男になれるようにがんばります。

すてきなしん切

磐田市立東部小学校 二年

吉田 芽唯

二年生の七月にさんかん会がありました。その日は、おや子で紙ひ行きをとばすじゅぎょうでした。みんなのおとうさんやおかあさんがきたころ、となりのせきのルアナさんがとぜんなきだしたのです。わたしはルアナさんのことがしんぱいになり、

「大じょうぶ？」

と聞きました。でもルアナさんはなにもこたえずなっていました。私は二回聞きましたがずっとなっていたので、つぎはちがう言ばで聞いてみることにしました。

「なんでないてるの？」

すると、ルアナさんは、

「おかあさんがいないの。」

とこたえてくれたのです。私はそれを聞いてかわいそうだなとおもいましたが、かな

しんでいるルアナさんにを言つてあげればいいのかわからず、それいじょうルアナさんにこえをかけてあげられませんでした。

わたしがずっとかんがえていると、さえさんがきました。ルアナさんに私と同じようになぜないているのか聞いていました。でも私とちがうところがあつたのです。それは、ルアナさんと目をあわせ、体をなでてあげながら聞いていたことです。そして、「大じょうぶ。」

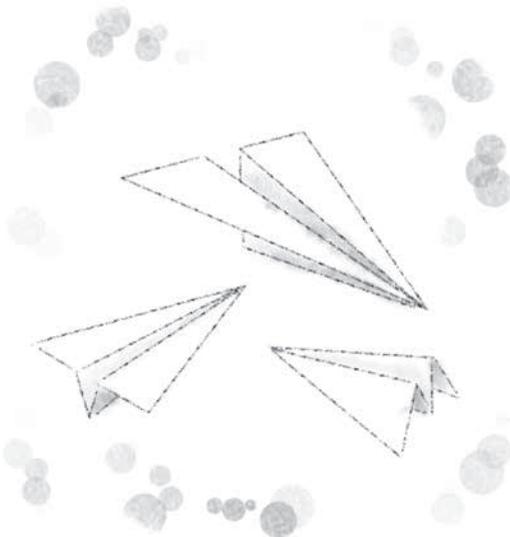
ではなく、

「みんないるから大じょうぶだよ。」

とやってあげていました。同じ大じょうぶという言ばでもルアナさんにとってはちがいました。さえさんはルアナさんのかなしい気もちがなくなるよう、あんしんできるようにしてあげていました。そうすると、たく山あつたかなしい気もちがだんだんすくなくなることを知りました。

わたしはルアナさんのことをしんぱいしてこえをかけました。ルアナさんのことをおもつてしたことなのでそれもしん切なの

だとおかあさんが言つてくれました。でもさえさんのようにともだちがどうしてほしいのかかんがえてあげられるしん切がすてきなとおもいました。わたしもともだちからすてきなとおもつてもらえるようなしん切ができるようになりたいです。



人から人へ

浜松市立佐鳴台小学校 六年

渡邊 晴子

あれは五年生の終わりのころです。私は、ある病気で入院することになりました。入院するのがいやで落ちこんでいました。そんな私を救ってくれたのが看護師さんたちでした。

まずうれしかったことは、看護師さんが笑顔でむかえてくれたことです。落ちこんでいた私を看護師さんは楽しい話をたくさんしてはげましてくれました。

次にうれしかったのは、点滴の針をさす時痛さを感じないようにしてくれたことです。針をさしている時も私からは見えないうようにしてくれたり、

「何が好きなんですか。」と、全然ちがう話をして盛り上げてくれたりして痛いどころか楽しませてくれました。

他には、点滴をしている時、動けない私に本をたくさん持ってきてくれたり、いろんな話をしてくれたりしたことです。入院している子ども達に移動図書といってたくさんの本を持ってきてくれました。他にはこんな話もしてくれました。

「看護師の仕事はね、入院している人の気持ちをやわらげることです。」

と看護師さんの仕事についても知ることができて、もっと聞いてみたいと思いました。

最後、退院の日にはあんなにいやだった入院が、たくさん看護師さんのおかげでとてもいい体験をしたと思えるようになりました。どんなに小さな、ささいな出来事でも、看護師さんは全力で立ち向かってくれます。そんな看護師さん達のことを今でもはつきりと覚えています。

そして今回私が体験して発見したことは、「人と人との関わりの中で親切が生み出されていく」ということです。必ずしも人と人が関わり合うと親切が生み出されるわけではないこともあります。それぐらい親切とは、身近にあるものだと思います。

相手のためにする目に見えるような親切から、目には見えないけれどかげながら支えてくれる親切と、どちらも同じぐらいの価値があると思います。親切にした人もされた人もおたがいにやさしい気持ちになれる、そんな一つ一つの親切を大事にしていきたいです。

看護師さんが私にしてくれたように、笑顔で接することや、相手をはげますこと、気づかいすることを、生活の中でできるようになりたいと思います。